



TITLE:

研究室彙報

AUTHOR(S):

CITATION:

研究室彙報. 京都大学生涯教育フィールド研究 2013, 1: 101-102

ISSUE DATE:

2013-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/174233>

RIGHT:

【研究室彙報】

2012 年度 担当学科

一学 部

教 授 前平泰志

同和・人権教育論（前期）

生涯教育学演習ⅠA（前期）

准教授 渡邊洋子

生涯学習概論Ⅰ 水曜 2 限（前期）

相関教育システム論基礎演習ⅡA（前期）

生涯教育学専門ゼミナールⅠ（前期）

相関教育システム論基礎演習ⅡB（後期）

生涯教育学専門ゼミナールⅡ（後期）

一大学院

教 授 前平泰志

生涯教育学演習ⅡB（後期）

准教授 渡邊洋子

生涯教育学研究Ⅰ（前期）

生涯教育学演習ⅠB（前期）

生涯教育学講読演習（後期）

生涯教育学演習ⅡB（後期）

授業報告

生涯教育学専門ゼミナールⅠ・Ⅱ

報告者：藤代 諒

本授業は、2012 年度は前期・後期ともに水曜 3 限にあり、生涯教育学研究に関する基本的な知識や方法論を学び、あわせて卒業論文に関する研究指導を行うものである。前期の生涯教育学専門ゼミナールⅠではグループを 2 つに分け、参加する学生たちの問題意識をもとにグループ内でブックレポートを発表し合いそれぞれの問題意識を深める作業を行った。そして、修士課程の院生や卒業論文を控える 4 回生を中心に研究発表を行い、質疑応答やディスカッションをした。3 回生にはグループ内でのブックレポートの発表や上回生の発表から自身の問題意識の整理や研究発表について学ぶ機会となった。ブックレポートでは「身体表現」、「高齢者の学び」、「読書による自己形成」、「青少年育成」、「生涯スポーツ」、「博物館教育」のような個別のテーマがあがった。後期の生涯教育学専門ゼミナールⅡでは、4 回生の卒業論文の研究指導を中心に、各々の問題意識をより明確化しつつ、それにもとづく研究の中間発表を行ない、共同のディスカッションを通して相互の研究を完成度の高い論文にまとめていくことを目指した。卒業論文の題目として「読書が自己形成をもたらす意味」、「生涯スポーツのアクセシビリティをめぐる考察—車いすテニスが手がかりに—」、「定年退職者の学びと生きがい」があり、3 名の 4 回生のテーマに対して参加者で共同のディスカッションをおこない、研究の質を上げるような取り組みが自主的に見られた。また、後期は個別テーマについての個人発表を 3 回生も前期の問題意識の整理を活かして発表をした。その他には、卒業論文提出後に、3 名の 4 回生の卒業論文発表会を 3 回生主体で行い、3 回生にとって来年度への卒業論文準備に大いに参

考になる機会となった。また、特別企画として映画を鑑賞してその内容についてフリーディスカッションをする会を設け、ストーリー、セリフの意図など映画の内容について討論する中に各々の視点や感情、知識が合わさり、時間が足りなくなるくらい白熱したディスカッションが行われた。

これらのように、卒業論文に関する研究指導を中心に行いつつ、学生の自主性から自己主導的に授業運営が行われた点が生涯教育学においてもすごく意味のあることであり、学生たちが各々の問題意識を深める機会になった授業であった。

相関教育システム論基礎演習ⅡA・ⅡB

Undergraduate Seminar: Interdisciplinary Studies of Educational System IIA・IIB

報告者: 中尾友香

相関教育システム論基礎演習ⅡA・ⅡBは、本学の教育学部2回生から4回生を対象に、前期・後期それぞれ水曜日4限目に開講された。担当教員は渡邊洋子准教授である。前期も後期も、学生が授業を作っていくことに重きが置かれた授業であったため、学生が「この半期で何をするか」を議論し実行していった。前期の授業での学生の議論をきっかけに、来年度の教育学部のシラバスに「キャリア教育」が組み込まれることになったのは、この授業に参加した学生たちの大きな成果だったといえる。

以下では前期と後期それぞれの授業の様子を報告する。

【前期】

テキスト：上杉 孝實著『生涯学習・社会教育の歴史的展開―日英比較の視座から』（松籟社、2011）

授業で扱うテキストは予め決定されたものだったが、授業のすすめ方については学生が議論して次のように決まった。

- ・受講生を3つのチームに分ける。全員がテキストを事前に読んできて、ディスカッションの多い授業にする。
- ・テキスト全8章を2章ずつ4つのセットに分け、その1セットを1つのチームが担当する。ただし、担当とは司会進行や補足資料紹介等を担当することである。
- ・授業も2回分で1セットとする。1回目の授業では各チーム内でそのセットについて議論する。チーム内で論点をいくつかを取り出し、全体で共有する。2回目の授業では、前回共有された論点について、担当チームが補足資料を持ち寄りたりして、より深い議論を行う。
- ・それまでの議論を整理する「中間まとめ」、最終回には「まとめ」の回を設ける。

チーム内での議論、全体議論は毎回白熱したものとなったが、ここでは全体で議論されたテーマを少し紹介する。「生涯教育、学習と社会教育とを混同することの問題点とは」、「日本における『リベラルな教育』と『継続教育』のバランスは今のままでいいのか」、「p135『教育そのものを民衆のコントロールのもとに置く』とはどういうことか」、「日本において職業教育・キャリア教育はどのように行われていけばよいか」、などである。

就職活動中の学生も多かったため、働くことと学ぶこと、大学で学ぶということについて、自らの問題として捉えて取り組んでいたようである。ここでの議論が新しい科目設立に繋がったのは先に触れた通りである。

【後期】

受講人数：学部生 7 人、大学院生 3 人

テキスト：シャラン・B・メリアム編、立田慶裕 [ほか] 訳『成人学習理論の新しい動向：脳や身体による学習からグローバリゼーションまで』（福村出版，2010）

後期は受講生が少なかったこともあり、取り上げるテキスト選びから学生が行なった。受講生で図書館に行き、それぞれが推薦書を持ち寄ってその中から授業で扱うものを選んだ。授業のすすめ方は次のように決まった。

- ・ 1 コマにつき 1～2 章取り上げ、それぞれの章についてレジュメにまとめてくる担当者を決める。担当者は設定するが、全員その日の章を読んでくる。
- ・ 担当者はその章の要約、論点、資料をまとめてくる。
- ・ 授業前半は担当者による発表、後半は議論の時間にする。
- ・ まとめの時間を設ける。

後期の授業でも現代社会の問題と関わった議論が多くあった。「学ぶことと知ることの非西洋的視点」の章などでは、これまで自分たちが受けてきた教育を振り返るような議論や、「身体」や「スピリチュアリティ」に焦点の当たった章では体罰の問題などについて真剣な議論があった。授業期間中に海外渡航をした人が多く、そこでの「意識変容」を本書と結びつけて、現代の大学生の意識についての議論もされた。

テキストを一通り読み終わってからは、まとめの時間を設けた。それぞれの章に触発されたテーマや、それを自分の興味関心にひきつけたテーマを各自が発表しあい、期末レポートに仕上げていった。

前期と後期を通じて共通していたのは、それぞれの学生が「自分がこの授業で何をしたいか」を前向きに考えていたことである。授業が終わってからも考え込んでいる様子や、話し合いを続けたりする様子も多々見られた。ただ一方的に受けるのではない授業であったといえるだろう。

生涯教育学演習 IB, IIB

報告者：渡川 智子

Advanced Seminar on Lifelong Education

Tomoko WATARIKAWA

2011年度の生涯教育学演習 IB, IIB は、火曜日隔週の4限, 5限に開講された。生涯教育学講座・生涯教育学の演習は、昨年までは前平教授と渡邊准教授の2人で担当されていたが、2012度から前平教授が研究科長になられた都合により、本年度からは前平教授が「生涯教育学演習 IA, IIA」(月曜4限)、渡邊准教授が「生涯教育学演習 IB, IIB」(火曜日4, 5限隔週)と、2人の先生がそれぞれの演習を担当する形となった。本報告では、渡邊准教授が担当された「生涯教育学演習 IB, IIB」の授業報告を行っていく。

本演習は、「生涯教育学研究の問題意識と基本的アプローチ、研究対象、研究の方法と形態の吟味と選択、さらに具体的な作業の進め方などについて、個々の参加者の研究発表による共有化と議論を通して体験的理解と体得をはかり、各自がそれらの成果を自らの研究に活かせるようになることを目的とするものである。」(「生涯教育学演習 IB」概要, 2012年度シラバスより抜粋)という目的のもと開講された。授業は主に1コマ(90分)につき1人の発表・議論(全体)という構成で、それが2コマ続きで行われる。毎回、進行を行う司会者を1名(毎回違う人)、発表者1人につきコメンテーター(中心にコメントを行う人)を1人決めている。授業での発表は“義務”ではなく、それぞれが自分の研究成果や構想を発表できる“権利”として捉え、参加者の積極的で自主的な運営のもとに行われた。発表内容や形式に特に決まりはなく、自分が現在進めている研究や論文などについて、自分の好きな形で発表することが可能である。

授業に出席しているのは、生涯教育学講座の修士課程(専修コース含む)、博士課程に在籍の学生をはじめとして、以前講座に在籍していた卒業生や教育施設の現場で働いている社会人の方、京都大学シニアキャンパス(2005~2008年度に開講)の受講生など、在籍の学生だけでなく、様々なバックグラウンドを持った社会人の方々が多く出席されている。このことにより、各人の幅広い経験や専門知識などをリソースとして、毎回非常に多彩で広がりある議論が繰り広げられた。本格的な社会経験も無く、人生経験も浅い私たち学生にとって、社会人の方々の多角的な視点、そして体験から紡がれた多くの“知”は、非常に示唆に富むものばかりであった。

自らの考えや研究を他の人に伝え、他の人からの意見を聞くこと、他の人の発表を聞くことを通して、自分の問題意識や研究の具体性、方法論について、より柔軟な視点を得ながら相対的に捉えることが可能となる。様々なアドバイスや活発な議論、それによって生まれる新たな疑問や葛藤は、各自の研究を練りながら深めていったことだろう。現場起源から現場回帰が多い生涯教育において、目の前の研究に責任が持てなければ実践的な現場でも責任は持てない。それぞれの研究が他の人に活用されることも想定しながら、自身の研究、そして他の人の研究の批評を常に責任を持って取り組まねばならない。研究者としての責任ある態度を意識しながら、次年度も参加者の自主的で活発な運営をめざしていきたい。